

漢語西寧方言の2音節語における声調中和現象

川澄 哲也

0 序

本稿では、川澄(2006)に続いて漢語西寧方言^{*1}(以下「西寧方言」)の声調を扱う^{*2}。川澄(2006)では、自身が実地調査で収集したデータ^{*3}に基づき、西寧方言の声調体系と2音節語における連続変調について記述した。以下、その論旨を述べる。

西寧方言は、単音節レベルでは44(高平)調と24(低昇)調の2声調のみが対立する。しかし2音節語における変調パターンを観察すると、44調をもつ要素群と24調をもつ要素群それぞれの中には、2種類の、振舞いの異なるグループが含まれていることがわかった。川澄(2006)では、その変調パターンの違いに基づき、44調と24調それぞれをaとbの2グループに分けた。そして西寧方言は44a調、44b調、24a調、24b調の4声調体系であると考えた^{*4}。

次頁の表1は、各々の声調を組み合わせて2音節語を形成した際に、出力としてどのような音形が現れ得るかを一覧にしたものである。

^{*1} 西寧方言は、中国青海省西寧市に居住する漢族と回族が用いる漢語の一変種で、北方方言(西北官話)に属している。

^{*2} 西寧方言の声調に関する記述としては他に張(1980)、張・朱(1987)、張(1997)、都(2001)等があるが、いずれも筆者の調査結果と異なる部分が多い(詳細は川澄2006, pp. 92-97 参照)。なお川澄(2006)以降に、張(1997)付属の音声テープを利用して西寧方言の声調を実験音声学的手法で分析した樋口(2006)が発表されている。

^{*3} 調査に協力して下さったのは、ともに西寧市で生まれ育った趙宗洲氏(漢族・1946年生まれ・男性)と魯峻氏(漢族・1945年生まれ・男性)である。本稿で用いる西寧方言のデータも、このお二人から得られたものを用いている。

^{*4} 一部の例外はあるが、西寧方言と漢語の標準変種「普通話」の声調は以下のような対応関係にある(ただし旧入声字に関してはこの限りではない)。

西寧方言	普通話
44a 調	55 調 (第一声)
24a 調	35 調 (第二声)
44b 調	214 調 (第三声)
24b 調	51 調 (第四声)

なお、西寧方言の声調素(toneme)については現段階では分析が十分に進んでおらず、その確定は今後の課題である。

表 1)*⁵

第 1 音節 \ 第 2 音節	44a 調	24a 調	44b 調	24b 調
44a 調	44 調-44 調 24 調-44 調	44 調-44 調 24 調-24 調	44 調-44 調 21 調-44 調	44 調-44 調 21 調-24 調
24a 調	24 調-44 調 21 調-44 調	24 調-24 調 21 調-44 調	21 調-44 調 21 調-24 調	21 調-24 調
44b 調	44 調-44 調 44 調-21 調	44 調-24 調 44 調-21 調	44 調-21 調 21 調-44 調	44 調-24 調 44 調-21 調
24b 調	24 調-44 調 21 調-44 調	24 調-24 調 21 調-44 調	21 調-44 調	24 調-24 調 21 調-44 調

表 1 からわかるように、西寧方言で 2 音節語を形成した場合、可能な声調の組み合わせ方 16 通りのうち、14 通りにおいて複数の音形が出現し得る。

川澄(2006)、あるいはその他の先行研究で解明できていないのは、複数の出力が有り得る組み合わせにおいて、ある語がどちらの音形で発音されるかを決めている要因は何か、という点である*⁶。本稿では、「声調の中和」という概念を導入するとこの未解決の問題点に対し簡潔な説明が与えられることを示す。

1 声調の中和現象

西寧方言の議論に入る前に、まず第 1 節で、次節以降の分析で重要となる、声調の中和現象について説明を加えておきたい。

漢語の標準変種である普通話では、55 調、35 調、214 調、51 調という 4 種類の声調が用いられる。これら 4 声調を組み合わせると 2 音節語を形成した場合、出現し得る音形は、表 2 に掲げる 19 種類である。

*⁵ 表 1 に挙げた以外に、第 1 音節 44a 調、第 2 音節 24a 調の場合には 44 調-24 調という音形も現れた。また 24a 調同士、24b 調同士を組み合わせただけの場合には 21 調-24 調という音形も現れた。さらに第 1 音節 44b 調、第 2 音節 24b 調の場合にも 21 調-24 調という音形は現れた。しかし本注で言及したパターンは、表 1 に挙げるものに比べると用例数が極端に少ない。そのため本稿ではこれらは例外と考え、考察の対象外としておく。

また第 2 音節に現れている 21 調は、川澄(2006)で“N”と記していた部分を修正したものである。川澄(2006)では、44 調の後に現れる 21 調の聴覚的印象が普通話の「軽声」(次頁参照)と類似していたため、安易に両者を同一視して“N(=neutral)”と記した。しかしその後の分析で、西寧方言の第 2 音節では声調の中和がより広範囲に渡って起きていることが明らかとなった(本稿第 2 節参照)。そのため第 2 音節に現れる 21 調のみを“N”と記していたのは誤りであり、改める。

*⁶ 川澄(2006)では、出現音形を決める明確な条件を見出すのが難しいという理由から、「どの音形で出現するかは、語ごとに決まっていると考えるのがよい」と結論付けた。その他の先行研究が提案する様々な「条件」は、大変に煩雑であるので引用は割愛する(先行研究の見解については川澄 2006 の pp. 94-97 にまとめたので、そちらを参照されたい)。

表2)

	組み合わせ方	出現する音形	
		A	B
第1音節が55調	55調+55調	55-55	55-2
	55調+35調	55-35	
	55調+214調	55-214	
	55調+51調	55-51	
第1音節が35調	35調+55調	35-55	35-3
	35調+35調	35-35	
	35調+214調	35-214	
	35調+51調	35-51	
第1音節が214調	214調+55調	21-55	21-4 (35-3)
	214調+35調	21-35	
	214調+214調	35-214	
	214調+51調	21-51	
第1音節が51調	51調+55調	51-55	51-1
	51調+35調	51-35	
	51調+214調	51-214	
	51調+51調	51-51	

Bに挙がる4つの音形はいずれも、中国語学で「轻声」(light tone / neutral tone)と呼ばれる声調が第2音節に現れているものである。轻声は、強勢をもたない音節に現れる、弱く短い声調である。轻声が現れる場合、普通話で本来対立する4声調は中和する。どのような語に轻声が現れるかは、包括的に説明することができず、個別に覚えていくしかない。

曹(1998)は、普通話以外にも、いくつかの北方方言で類似の声調中和現象が確認できると指摘する。ここでは曹(1998)の主要な考察対象である新疆ウイグル自治区、巴里坤方言(西北官話)の事例を引用する^{*7}。巴里坤方言では44調、52調、21調、24調の4声調が用いられる。それぞれを組み合わせると2音節語を形成した場合、出現し得る音形は次頁表3の通りである。

^{*7} 曹(1998)では普通話と巴里坤方言の他、類似の現象が済南、洛陽、蘭州そして西寧の漢語方言でも確認できると指摘している。但し曹(1998)の西寧方言に関する記述は部分的で、西寧方言が有する4種の声調のうちの1種(=本稿の24b調)に言及しているのみである。また西寧方言のデータは張(1980)を利用している。注2で述べたとおり、張(1980)の声調に関する記述には筆者の調査結果と異なる部分が少なからず存在する。

表 3) *⁸

	組み合わせ方	出現する音形	
		A	B
第 1 音節が 44 調	44+44	44-44	44-52
	44+52		
	44+21		
	44+24	44-21	
第 1 音節が 52 調	52+44	52-44	44-21
	52+52	52-52	
	52+21	52-52	
	52+24	52-21	
第 1 音節が 21 調	21+44	52-44	21-52
	21+52		
	21+21	52-52	
	21+24	52-21	
第 1 音節が 24 調	24+44	21-44	21-24
	24+52	21-52	
	24+21	21-52	
	24+24	44-21	

普通話の軽声とは異なり、巴里坤方言では第 2 音節が弱く短く発音されることはないという。しかし普通話についての表 2 と同様に、表 3 の B に挙がる音形ではいずれも、第 2 音節で 4 種の声調が対立を失っている*⁹。

曹(1998)によれば、巴里坤方言でどのような場合に声調中和現象が起こるかは、普通話の軽声の場合と同様に、語彙的に決まっているという。その一方で、普通話やいくつかの北方方言では、以下に挙げた形態論的な条件に当てはまる 2 音節語において、声調中和の起こりやすい強い傾向があると指摘する*¹⁰。

[1] 第 2 音節が接尾辞や方位詞などの拘束形態素*¹¹である語

[2] 重複構造(reduplication)の名詞

以上の内容を踏まえたうえで、次節では西寧方言の分析を行う。

*⁸ 表 3 は、曹(1998)、p. 50 の表 6 を、本稿の先掲表 2 に対応するように書き改めたものである。

*⁹ 出現音形が 1 種類のみ組み合わせの場合は、中和が起きたかどうかは判断できないという。

*¹⁰ 同様の条件は、江蘇省の連雲港方言(江淮官話)を扱った岩田(1984)にも挙がる(p. 39)。なお曹(1998)は[1][2]以外の条件もいくつか挙げているが、本稿での議論と関わらないので省略する。

*¹¹ 曹(1998)はその例として“-子”“-头”“-巴”“-上”“-下”“-边”“-面”などを挙げている。

2 西寧方言の声調中和現象

第2音節における声調中和という観点を西寧方言の分析に取り入れてみると、先掲の表1は以下のように書き改めることができる。Bに挙げたものが、第2音節で中和が起きていると考えられる音形である*¹²。

表4)

	組み合わせ方	出現する音形	
		A	B
第1音節が44a調	44a調+44a調	24-44	44-44
	44a調+24a調	24-24	
	44a調+44b調	21-44	
	44a調+24b調	21-24	
第1音節が24a調	24a調+44a調	24-44	21-44
	24a調+24a調	24-24	
	24a調+44b調	21-44	21-24
	24a調+24b調		
第1音節が44b調	44b調+44a調	44-44	44-21
	44b調+24a調	44-24	
	44b調+44b調	21-44	
	44b調+24b調	44-24	
第1音節が24b調	24b調+44a調	24-44	21-44
	24b調+24a調	24-24	
	24b調+44b調		
	24b調+24b調	24-24	

上表の音形Aには、両音節とも変調しないものと第1音節が変調するものが含まれるが、第2音節で変調が起きないという共通点がある。Bに挙がる音形では、第2音節で声調が中和していると考えられる。第1音節が24a調の場合は、その他の場合に比べると不完全ではあるが、第2音節において44a調と24a調、44b調と24b調それぞれの対立が失われているので、やはり中和が起きていると考えることができる。音形Bの第2音節において声調中和が発生しているという考えを裏付けるように、前節末に挙げた、中和が起りやすい条件[1][2]に合う2音節語は、大多数が

*¹² 巴里坤方言同様(注9参照)、西寧方言でも出現音形が1種類しかない組み合わせ(24a調+24b調、24b調+44b調)の場合は、中和が起きたかどうかを判別することはできない。

B の音形で発音される*¹³。以下の表 5 に用例の一部を示す*¹⁴。条件[1][2]に合う語には下線を付してある。

表 5)

組み合わせ方	用例	
	A	B
44a 調 + 44a 調	吹灯[tʂ ^w wɪ ²⁴ tʂ ⁴⁴](灯を吹き消す) 东西[t ^w wɔ̃ ²⁴ ʃʒ ⁴⁴](東西) 收秋[ʃuɪ ²⁴ tɕ ^h ju ⁴⁴](秋の収穫)	桩子[tʂ ^w wɔ̃ ⁴⁴ tsɿ ⁴⁴](くい) 星星[ɕjɿ ⁴⁴ ɕjɿ ⁴⁴](星) 秋收[tɕ ^h ju ⁴⁴ ʃuɪ ⁴⁴](秋の収穫)
44a 調 + 24a 調	脱鞋[t ^{hw} u ²⁴ xɛ ²⁴](靴を脱ぐ) 猪食[tʂy ²⁴ ʃɿ ²⁴](豚の飼料) 香油[ɕjɔ̃ ²⁴ ju ²⁴](ごま油)	木头[mɥ ⁴⁴ t ^h u ⁴⁴](木) 砖头[tʂ ^w wɑ̃ ⁴⁴ t ^h u ⁴⁴](煉瓦) 香肠[ɕjɔ̃ ⁴⁴ tʂ ^h ɔ̃ ⁴⁴](ソーセージ)
44a 調 + 44b 調	喝酒[x ^w u ²¹ tɕju ⁴⁴](酒を飲む) 山顶[sɑ̃ ²¹ tʃjɿ ⁴⁴](山頂) 竹笋[tʂy ²¹ s ^w wɔ̃ ⁴⁴](たけのこ)	箱子[ɕjɔ̃ ⁴⁴ tsɿ ⁴⁴](箱) 桌桌[tʂ ^w u ⁴⁴ tʂ ^w u ⁴⁴](机) 春笋[tʂ ^{hw} wɔ̃ ⁴⁴ s ^w wɔ̃ ⁴⁴](春たけのこ)
44a 調 + 24b 調	切面[tɕ ^h i ²¹ m ^h jɛ ²⁴](麵を切る) 端菜[t ^w wɑ̃ ²¹ ts ^h ɛ ²⁴](料理を運ぶ) 猪圈[tʂy ²¹ tɕy ²⁴](豚小屋)	东面[t ^w wɔ̃ ⁴⁴ m ^h jɛ ⁴⁴](東側) 街上[ke ⁴⁴ ʃɔ̃ ⁴⁴](街頭) 香菜[ɕjɔ̃ ⁴⁴ ts ^h ɛ ⁴⁴](シャンツァイ)
24a 調 + 44a 調	读书[tɥ ²⁴ fɥ ⁴⁴](読書する) 牛车[n ^h ju ²⁴ ts ^h ɛ ⁴⁴](牛車) 钱包[tɕ ^h jɛ ²⁴ pɔ̃ ⁴⁴](財布)	前边[tɕ ^h jɛ ²¹ p ^h jɛ ⁴⁴](前) 南边[nɑ̃ ²¹ p ^h jɛ ⁴⁴](南) 皮包[p ^{hi} ʒ ²¹ pɔ̃ ⁴⁴](革カバン)
24a 調 + 24a 調	抬头[t ^h ɛ ²⁴ t ^h u ²⁴](頭をもたげる) 年头[n ^h jɛ ²⁴ t ^h u ²⁴](年初) 床沿[tʂ ^{hw} wɔ̃ ²⁴ jɛ ²⁴](ベッドの縁)	锄头[tʂ ^h y ²¹ t ^h u ⁴⁴](すき) 鞋鞋[xɛ ²¹ xɛ ⁴⁴](くつ) 学堂[ɕ ^w y ²¹ t ^h ɔ̃ ⁴⁴](学校)

*¹³ 一方「動目構造」の語(verb-object compound)は、第 2 音節の要素の方が意味的に重要である(Duanmu 2000, pp. 130-132 参照)ため、第 2 音節で中和の起こりにくいことが予想される。この予測を裏付けるように、動目構造の語は、ごく少数の例外を除き、音形 A で発音される(岩田 1984:39 によれば、江蘇省の連雲港方言でも、動目構造の語の場合、第 2 音節の中和は起こりにくいという)。なお Duanmu(2000:132, 141)では、普通話の動目構造の語に関して、意味的に重要な第 2 音節の方に stress が付与されると述べている。この指摘は西寧方言にも当てはまる可能性があり、本稿が扱う声調中和現象についても stress と関連付けた分析を行う必要があると考えている。ただし現時点では考察の進展が不十分であるため、今後重点的に取り組む課題としておきたい。

*¹⁴ 出現音形が 1 つしかない組み合わせについては表中ではなく本注で簡単に言及しておく。24a 調+24b 調の場合、出力は 21 調-24 調の 1 通りのみで、西寧方言の内部状況から考えて音形 A になると予想される動目構造の“熬夜[nɔ̃²¹ i²⁴](徹夜する)”も、先掲条件[1]に合致し音形 B での出現が予測される“南面[nɑ̃²¹ m^hjɛ²⁴](南側)”も同一調値になる。24b 調+44b 調の場合、出力は 21 調-44 調の 1 通りであり、音形 A での出現が予想される動目構造の“倒酒[tɔ̃²¹ tɕju⁴⁴](酒を注ぐ)”も、先掲条件[1]に合致し音形 B になると考えられる“柿子[sɿ²¹ tsɿ⁴⁴](柿)”も同じ調値で現れる。

24a 調+44b 調	淘米[tʰɔ ²¹ mǐ ⁴⁴](米を洗う) 鼻孔[pǐ ²¹ kʰwǝ̃ ⁴⁴](鼻の穴) 蓮子[ljɛ̃ ²¹ tsl ⁴⁴](蓮の実)	鼻子[pǐ ²¹ tsl ²⁴](鼻) 盘子[pʰã ²¹ tsl ²⁴](大皿) 房子[fɔ̃ ²¹ tsl ²⁴](部屋)
44b 調+44a 調	点灯[tʃjɛ̃ ⁴⁴ tɕ ⁴⁴](点灯する) 水鴨[ɬj ⁴⁴ jA ⁴⁴](鴨) 手心[ɕu ⁴⁴ ɕjɪ ⁴⁴](たなごころ)	左边[ts ^w u ⁴⁴ pʃjɛ̃ ²¹](左) 尾巴[ɕ ⁴⁴ pA ²¹](尾) 小心[ɕjɔ̃ ⁴⁴ ɕjɪ ²¹](気をつける)
44b 調+24a 調	洗头[ɕ ⁴⁴ tʰu ²⁴](頭を洗う) 水壶[ɬj ⁴⁴ xɥ ²⁴](やかん) 整年[tɕɔ̃ ⁴⁴ nʃjɛ̃ ²⁴](一年中)	枕头[tɕɔ̃ ⁴⁴ tʰu ²¹](枕) 码头[mA ⁴⁴ tʰu ²¹](埠頭) 每年[mɪ ⁴⁴ nʃjɛ̃ ²¹](毎年)
44b 調+44b 調	洗脸[ɕ ²¹ nʃjɛ̃ ⁴⁴](顔を洗う) 雨水[ɕ ^w ɪ ²¹ ɬj ⁴⁴](雨水) 老虎[lɔ ²¹ xɥ ⁴⁴](虎)	椅子[ɕ ⁴⁴ tsl ²¹](いす) 锁锁[s ^w u ⁴⁴ s ^w u ²¹](錠前) 耳朵[ɛ ⁴⁴ tʰu ²¹](耳)
44b 調+24b 調	炒菜[ts ^h ɔ̃ ⁴⁴ ts ^h ɛ̃ ²⁴](野菜を炒める) 摆饭[pɛ ⁴⁴ fã ²⁴](料理を並べる) 果树[k ^w u ⁴⁴ fɥ ²⁴](果樹)	里面[l ⁴⁴ mʃjɛ̃ ²¹](内側) 底下[tsl ⁴⁴ xA ²¹](下) 午饭[ɥ ⁴⁴ fã ²¹](昼ご飯)
24b 調+44a 調	背书[pʃj ²⁴ fɥ ⁴⁴](暗記する) 树根[fɥ ²⁴ kã ⁴⁴](木の根) 大葱[tA ²⁴ ts ^h wǝ̃ ⁴⁴](ねぎ)	下巴[xA ²¹ pA ⁴⁴](あご) 右边[ju ²¹ pʃjɛ̃ ⁴⁴](右) 大麦[tA ²¹ mɪ ⁴⁴](大麦)
24b 調+24a 調	下棋[ɕjA ²⁴ tʃɕ ²⁴](将棋をさす) 电壶[tʃjɛ̃ ²⁴ xɥ ²⁴](魔法瓶) ^{*15} 地图[tsl ²⁴ tʰɥ ²⁴](地図)	芋头[ɕ ^w ɪ ²¹ tʰu ⁴⁴](いも) 外头[we ²¹ tʰu ⁴⁴](外) 布鞋[pɥ ²¹ xɛ ⁴⁴](布靴)
24b 調+24b 調	下面[ɕjA ²⁴ mʃjɛ̃ ²⁴](麵を入れる) 布店[pɥ ²⁴ tʃjɛ̃ ²⁴](反物屋) 大雁[tA ²⁴ jɛ̃ ²⁴](大雁)	外面[we ²¹ mʃjɛ̃ ⁴⁴](外) 被被[pǐ ²¹ pǐ ⁴⁴](掛け布団) 大豆[tA ²¹ tu ⁴⁴](大豆)

以上のデータより、西寧方言にも声調の中和現象があり、それが起きた場合は表4のBに挙がる各音形が出現すると考えることができる。なお、ある語がA、Bどちらの音形で現れるかは、先述のとおり一部に形態論的観点から予測できる語もあるが、大部分のものは一つ一つ記憶しておく必要がある^{*16}。

^{*15} 調査協力者によれば、西寧方言で「魔法瓶」のことを“電壺”と呼ぶのは、魔法瓶が出回り始めた当時、人々が保温に電気を利用していると勘違いしたためだという。

^{*16} 表5では、第1音節あるいは第2音節が同一形態素であっても出現音形が異なっている事例がいくつか確認できる(e.g. 44a 調+24a 調における“香油”と“香肠”、44a 調+44b 調における“竹筴”と“春笋” etc.)。このことから、出現音形がどちらになるかは語彙的に定まっていることが窺われる。

3 西寧方言 2 音節語の声調音形決定方法

前節では、普通話や巴里坤方言にみられる声調中和現象が西寧方言にも存在することを示した。この事実に基づくと、出力として複数の声調音形が有り得る組み合わせにおいて、実際に出現する音形がどのような要因で決まるかという問題に対し、「声調の中和が起こらない語は音形 A で現れ、中和の起こる語は音形 B で現れる」という、非常に簡潔な説明ができるようになる。声調中和が起こるか否かは、一部に形態論的観点から予測できる場合もあるが、大部分のものは語彙的に決まっている。そのため、川澄(2006)を始めとする先行研究が見出そうとしてきた、出現音形を包括的に予測する条件は、存在しないと言える。

以下、西寧方言で 2 音節語の声調音形がどのように実現するか、現段階での筆者の考えを示しておきたい。

【1】 第 1 音節、第 2 音節それぞれの要素が、44a 調、24a 調、44b 調、24b 調のうちのいずれで発音するものかを判断する。

↓

【2】 その 2 音節語が、A、B どちらのパターンに属するものか(=声調中和を起こす語か起こさない語か)を判断する^{*17}。

↙

↘

【3】 A に属する(=声調中和の起きない)語

B に属する(=声調中和の起きる)語

必要に応じて以下の諸規則が適用され、出現音形が派生される^{*18}。

- ・規則 1 : 声調 → 21 / __ 44b
- ・規則 2 : 声調 a → 21 / __ 24b
- ・規則 3 : 44a → 24 / __ 声調 a

第 1 音節と第 2 音節に現れる声調の組み合わせ方に基づいて、表 4 の B に挙がる音形を当てはめる。

^{*17} 語によっては、A と B どちらの音形で発音するべきか調査協力者が判断に迷うものもあった。普通話には、第 2 音節を軽声と本来の声調のどちらで発音してもよい(=第 2 音節で中和が起きることもあれば起きないこともある)という揺れをみせる語があるが、同様の揺れをもつ語が西寧方言にもあると筆者は考えている。

^{*18} 規則 1 により、第 2 音節が 44b 調の場合、第 1 音節が常に 21 調に変調する。規則 2 により、44a 調+24b 調と 24a 調+24b 調という 2 種の組み合わせにおいて、第 1 音節が 21 調に変化する。また 44a 調+44a 調、44a 調+24a 調の組み合わせにおいて、第 1 音節が 24 調になることを説明するために、規則 3 を設ける。以上で言及していない組み合わせの場合は、両音節とも、単音節の際に出現する音形がそのまま現れる。

4 結

従来の西寧方言研究では、ある2音節語の声調がどのような音形で発音されるかを決めている要因は何かという点に対して、様々な見解が提出されてはきたものの、解明には至っていなかった。それに対し本稿では「声調の中和」という概念を取り入れ、中和発生の有無が出現音形を分ける要因であることを明らかにした。

今後は、より大きい単位を形成した際に出現する声調の分析も進め、西寧方言の声調システムを全面的に把握することを目指したい。

参考文献

- 曹徳和(1998)「读音不轻的轻音词」『中国語研究』第40号: 42-52.
- Duanmu, San(2000) *The Phonology of Standard Chinese*. New York: Oxford University Press.
- 都兴宙(2001)「西宁方言二字组连读变调研究」『青海民族学院学报(社会科学版)』第28卷第4期: 99-102.
- 樋口勇夫(2006)「西寧方言における単字調および“輕声”を伴う二音節語の調形」『名古屋学院大学論集 -人文・自然科学篇-』第43巻第1号: 21-42.
- 岩田礼(1984)「江蘇省・連雲港方言の音韻体系(II)」『アジア・アフリカ文法研究』13: 31-60.
- 川澄哲也(2006)「漢語西寧方言の声調 -声調体系、および連読変調に関する考察-」『東ユーラシア言語研究』第1集: 92-116. 東京: 好文出版.
- 張成材(1980)「西宁方言記略」『方言』1980年第4期: 282-302.
- (1997)『西宁話音檔』上海: 上海教育出版社.
- 張成材・朱世奎(1987)『西宁方言志』西寧: 青海人民出版社.

[付記]

本研究は日本學術振興會科学研究費補助金・基盤研究(A)「地球化時代におけるアルタイ諸語の急速な変容・消滅に関する総合的調査研究」(課題番号 21251006 ; 研究代表者: 久保智之)の援助を受けている。

汉语西宁方言在双音节词里发生的声调中和现象

川澄 哲也

摘要

本文在川澄(2006)的基础上,对汉语西宁方言的双音节词声调作了进一步的考察。川澄(2006)描写了西宁方言的声调系统和两字组连读变调的情况,论点如下:西宁方言的单字调只有两个,即44调和24调,但根据连读变调的情况(参见表1),44调和24调都应该分为a、b两类。因此,西宁方言共有四个调类。表1列举的是西宁方言两字组的连读变调规律。

表1)

第二音节 第一音节	44a 调	24a 调	44b 调	24b 调
44a 调	44 调-44 调 24 调-44 调	44 调-44 调 24 调-24 调	44 调-44 调 21 调-44 调	44 调-44 调 21 调-24 调
24a 调	21 调-44 调 24 调-44 调	21 调-44 调 24 调-24 调	21 调-24 调 21 调-44 调	21 调-24 调
44b 调	44 调-21 调 44 调-44 调	44 调-21 调 44 调-24 调	44 调-21 调 21 调-44 调	44 调-21 调 44 调-24 调
24b 调	21 调-44 调 24 调-44 调	21 调-44 调 24 调-24 调	21 调-44 调	21 调-44 调 24 调-24 调

(44a 调、24a 调、44b 调、24b 调大致分别相当于阴平、阳平、上声、去声。一些特殊变调不列在表内。)

由上表可见,西宁方言16种声调组合中有14种出现两个不同的调式。需要查明的问题是,一个双音节词该读哪个调式是由什么因素来确定的。但对于这一点,包括川澄(2006)在内的以往研究未能做出充分的解释。

本文采用“声调中和”的概念,就这一问题进行了考察。通过研究我们得到了一个十分简洁的结论,即发生中和的词读表1中各栏的上行所举的调式,而不发生中和的词则读另一个调式。

受領日 2011年4月22日

受理日 2011年6月25日